



Title	スペイン語 estar + ndo 形に関する若干の考察
Author(s)	出口, 厚実
Citation	Estudios Hispánicos. 2007, 31, p. 9-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/97970">https://hdl.handle.net/11094/97970</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# スペイン語 *estar* + *ndo* 形に関する若干の考察

出口 厚 実

## 0. はじめに

動詞*estar*に先行された現在分詞形が一般に「進行形」と称される複合統語形式を形成する事実はさまざまな角度から研究対象となってきた。現代スペイン語での統語意味面に絞ってもその先行研究は数多く、とりわけ動詞迂言形の重要な1タイプとして、また動詞の語彙アスペクトとの関連からも注目されてきたため、多くの精密な分析と活発な議論に恵まれた分野でもある。本稿は進行形の機能をより正確に把握し分離するための補完データとして役立つことを目指し、*estar* + *siendo*を含む非受動文がどの程度またどのように使用されているのかの実情を調べるのが主たる目的である。その過程で、進行形式と語彙アスペクト・タイプの「活動Activity」を関連づける見解と仮説の妥当性も検討してみたい。加えて、*estar* + *ndo*に対して従来とは異なる解釈と新たな分析視点を示唆することができれば幸いである。

## 1.0.

動詞を中心とする構文の語彙的アスペクトは、Aktionsart（以下AAと略記）のタイプで類別化されることが多い。ここでは、Vendler (1967) 風の状態State, 活動Activity, 到達Achievement, 達成Accomplishmentの4区分や、静態性と動態性を分別するための細かな基準及び静態的述語の下位クラスの種類についての詳細や適否をあらためて検討しない。ただ、意味上の等質性 (Moreno-Torres 2000 : 47) が認められる様態はStateに属すとみなす立場から、小論のテーマに選んだ*ser*は、状態（静態的）動詞のもっとも典型的な例と仮定する。動詞*ser* + 補語は、その静態的性質が原因で、実際に*estar* + *ndo*と共起しにくく、状態動詞が迂言形式*estar* + *ndo*と共に用いられるときは、その言語外状況をActivityと見なす (Clements 1985, De Miguel 1999) 一般化が可能かどうか、また、能動的持続を含むActivity (Doiz-Bienzobas 1995 : 147) なのか、*estar* + *ndo*は動詞で表される事態をActivity類化しその連続的・

累積的成立を明示する(山村 2001: 129)のかどうかという点は確かめておく必要がある。もし、それが事実でないならば、進行形との両立可能性をこのようなAA類型をベースにして行うことの根拠が揺らぐことになる。このため、静・動の両面性を持ち、Activityタイプとしても解釈可能な表現である *ser* + 過去分詞による受動進行形を除いた、*ser* + 属辞(形容詞句、名詞句、前置詞句、etc.)に限定して、これまで報告されにくく、隠され勝ちであった *estar* + *ndo* 構文の周縁部における実態データを観察する。

### 1.1. データ

現代スペイン語文法で、*ser*の進行迂言形 *estar* + *siendo*の扱いは決して記述的、中立であったとはいえず、誤用や外国語からの文法的借用などとレッテルを貼られ、とりわけ教育現場では公然と非難・忌避の的になる(Gómez Torrego 1989: 113)が多かった<sup>1</sup>。それはこの構文の分析にも少なからぬ影を落とし、その存在自体すら控え目に傍注程度に触れられる自主規制的傾向が見られ<sup>2</sup>、観察される用例の幅もかなり狭められるのが常であった<sup>3</sup>。このような規範的な縛りから逃れ、有りのままの現状に少しでも近づきたいという意図から、可能な限り多くの用例を拾い上げ、それらのコンテキストを含めた実使用面への考慮を重視した。もちろん、スペイン語圏内の各地域変異をおおざっぱにせよカバーすることは不可能だったし、社会的なバリエーションやレジスタ差を満遍なく均して収集し得たとは思われないが、少なくとも、ある種のスペイン語のサンプルや出所を濾過して、‘純正(らしい)’と見なされる無難なスペイン語断片の集合体に制限する方式を採らなかった。もっとも、特定の仮説を検証するのが主眼ではないため、資料を一定時期の特定方言に絞り厳密な比較方法を用いて考査することもしなかった。

ここでは2つの資料集を利用した。1つは、*estar* + *ndo* 構文の中で動詞 *ser* が用いられるケースの相対的な比重を知る必要性を感じたため、現代スペイン語の文法タグ付き汎用データベース LEXESP を参照した(コーパスA; 参照記号 LX)。この資料は約500万語からなる各種領域の文章語サンプルの総合的集合体で、その構成比もコントロールされている。もう1つは、他の一般的語法の検索調査の目的も含めて、なるべく多数の例文を検出できるように個人的に蓄積したもので、現代語と見なし得る範囲内であれば、ジャンルを問わずまたその細別配分比を自由にした、採取単位サイズも任意規模のスペイン語文章テキストの雑集合体である(コーパスB)。ここには少量であ

るが公表された口語体のテキスト化データも含まれている。

## 1.2. *estar + ndo*と法・時制

最初に、*estar V-ndo*の全般的な分布状況を概観しておく。法・時制形の名称に言及する際、出口 (1986a)、Deguchi (1986b)、出口 (1997: 110) の第3章2.1.節、2.2.節で提案した3法2時制マトリックスを想定しているが、小論での*estar + ndo*構文に関する考察は、特にこのようなマクロ法時制システムを不可欠な前提にしているのではなく、直説法点過去、直説法線過去、接続法現在etc.をそれぞれ別個の「時制」と認めるような通例の解釈の下でも有効であろうと思われる。

問題の進行形式は非過去・過去の両時制の下で同様に生起し、また直説法、推定法、接続法のいずれの叙法範疇とも両立し得る。命令文には*estar + ndo*形式が実質的に用いられないので、この統語環境で接続法形（その異形体 *está, estad*を含めて）が出現しない。なお、直説法非過去形は命令行為文に利用することができる。本来、進行形式が各々の叙法・時制と独立して出現するのか、あるいは偏った分布を見せるのかは、その特質を論じる上で重要な一面と思われる。しかし、たいていの文法概説書は進行形構文の提示で、直説法現在、線過去など2, 3の法時制形についてわずかの作例のみが示され解説も簡略である。複合時制を含めてSolé (1990) は各時制についてその用法を比較的詳しく丁寧にコメントしている。もともと、接続法の進行形には触れられていない。

*estar V-ndo*形式の出現を、*estar*の定形・不定形別、及び前者についてはその法・時制別の分布状況をコーパスAから数え上げ、クロス集計したものを表(1)に示す。なお、この集計において「命令」形は、LEXESPの文法タグ記法に従うことにした。すなわち、命令法形と命令文中に使われた接続法形を合併することになるはずであるが、当資料体のなかには用例の存在を記録できなかった。

(1)

	直説法	推定法	接続法	小 計
非過去	2,293	61	74	2,428
過去不完結	943	52	113	1,108
完結	94			94
		(過去形の合計		1,202)

## (出 口)

非過去完了	62	0	1	63
過去完了	60	1	7	68
合計	3,452	114	195	3,761

不定詞				180
現在分詞				2

---

進行形総数				3,943
-------	--	--	--	-------

## (2)

	全動詞	進行形
非過去	251,580 (57.6%)	2,428 (66.9%)
過去	184,978 (42.4%)	1,202 (33.1%)
不完結	76,622 (47.0%)	943 (90.9%)
完結	86,571 (53.0%)	94 ( 9.1%)

コーパスA全体で約4,000例の進行形が見つかった。総語数5,020,930に対する相対頻度（1万分比）は7.85で、Torres Cacoulllos（1999：200）に引用される2種の現代散文コーパスでの値、5.1と10.1のほぼ中間に位置する。法・時制形の分布割合は非過去：過去、それぞれ66.9%、33.1%であり、これと全動詞の非過去・過去比と対比すれば【上表(2)】、前者での非過去形の優勢は明らかである<sup>4</sup>。最も顕著な差が現れるのは、アスペクトに起因すると思われる直説法過去時制における、不完結形vs完結形の分布である。完結形の進行迂言形は直説法過去全体の9.1%に過ぎないのに対して、LEXESP全体では、過去形の53%を占め過半に達することがわかる。表(1)での不定詞進行迂言形の出現頻度180は、単純形の定形・不定形の総和に関して、わずか6.8%である。一方、全データ中の単純形605,708での不定詞の割合は22.9%（実数138,799）に及び、これと大差を示す。また、全体で20,351の出現が記録され、約5%を示す現在分詞形について見れば、その進行形、つまりestando V-ndoの実例はごくまれであることがわかる。なお、上表の現在分詞2例ともestar + ndo構文自体が現在分詞構文として使用されているケースである【Cf.(3)(4)】

(3) Estando contemplando aquel escaparate en donde de alguna manera estaba

expuesta parte de su vida, en el quicio de la puerta del baño apareció Dorita Mendizábal vestida con el quimono rojo con bordados de flor de loto que Ramón Serantes había encargado al rata del puerto de Vigo. [t36.tgd]

(4) Y en estando mirándola topé con la mirada de su doncellica Inesilla, que a su lado marchaba, y me pareció su expresión algo burlona, como recordándome lo que entre ella y yo pasara la noche de antes, (...) [t50.tgd]

### 1.3. *estar* siendo 非受動構文

第1のデータ集合（コーパスA）に見出された *estar* V-*ndo* の構文<sup>5</sup>を動詞語彙別に集計した、出現頻度の上位15位までのリストが下表(5)である。これらは、Fernández Ramírez (1986 : 534) が進行形で頻用される動詞として列挙した20余の動詞（出現実数は提示されていない）と共通するものが多い。因みに、今回80の例を数え、全テキスト中に確認された862種の動詞の中で最頻トップ5の中に食い込んでいる動詞 *ser* は、彼の引用中にないことを付記しておこう。

(5)

<i>hacer</i>	: 202	<i>vivir</i>	: 56
<i>esperar</i>	: 123	<i>ocurrir</i>	: 53
<i>hablar</i>	: 119	<i>mirar</i>	: 47
<i>pasar</i>	: 102	<i>decir</i>	: 45
<i>ser</i>	: 80	<i>poner</i>	: 41
<i>pensar</i>	: 79	<i>empezar</i>	: 40
<i>ver</i>	: 79	<i>buscar</i>	: 39
<i>dar</i>	: 63		

本データ中で、*estar* *siendo* を含む文のうち、過去分詞を伴う受動文と伴わない非受動文の比は、56 : 24で、この迂言形式全体で *ser* + 属詞文が30%を占めていることが分かる。*estar* *siendo* + 過去分詞の方が多数を占め、構造上も重要な統語パターンであると認められるのは事実であるが、本稿では取り上げない。基本的な課題として、*estar* *siendo* V-*do* 受動文は、対応する *estar* V-*ndo* 能動文の態 *diátesis* バリエントと見なせるかどうか、*ser* 述語文の構成員か否かという点があるが、どちらについても確証を得ていないためである。

次にコーパスBから *estar* *siendo* 構文を検索して、総数で20,550例を抽出した。その中で、約4分の3に相当する15,690例が、過去分詞の後続する受動

進行形構文と数えられた。残りの例文約4,860例はser+属詞で構成される。本節は、これらの実例文を中心に、ser進行形文が散発的な例外的使用に甘んじているのではなく、広範囲の法・時制形式のもとで出現し得ることを示したい。それとともに、estar siendoの出現する統語環境の様々と、また同時にestar + ndoの果たす機能が他のAA類型の文に見られるものと比べ特に差が認められるか、このサブタイプ固有の機能や傾向があるかどうかを確かめてみることを兼ねている。はじめにser補語の内部構造にどのようなものが現れるか、簡略な分類で、各々に2, 3の用例を例示する。次に 1.3.2.でestarの各法・時制形に実例が存在するかどうか調べて、発見された各例文を転記した<sup>6</sup>。

### 1.3.1. 補語の構成種別

#### a. ser + 形容詞句

(6) “Nuestra actuación ha sido, está siendo y será transparente”, señaló ayer un portavoz gubernamental. [PA : 99/05/07]

(7) Su alimentación está siendo poco rica en vitaminas. [MR : 182]

(8) Esta temporada no está siendo muy propicia para Carlos Sainz, ya que en el Rally de Suecia también sufrió un accidente al chocar contra un alce. [MN : 02/03/19]

上文はいずれも、形容詞で表される性質を主語に帰属させる一般的なser文で、特に述語に可変性や流動性が意図されているとは思われない。属辞で表される意味の長時間に及ぶ広がり、別の法・時制の動詞形と繋がれて表現される上文(6)のような使用例は珍しくない【Cf.後出例文 (17) (19) (20) (31)】。しかし、estar siendoでもって区切られる境界線を境に差が生じるのではなく、実質は、前後と共通な“透明な状態が存在する”と陳述している。進行形を含むest<sup>2</sup> siendoはその形式自体の有標性によって、単純形のha sido, seráよりも引き立て効果をもつということが可能だろう。(7)で、ビタミンが不足勝ちになるのは、この星座占いの該当週という暗に限定された期間が対象であろう。通常のser文の属性規定がもつ時間の有効範囲を狭めている。ただし、この時期からpoco ricaの状況が開始するという起動解釈が強制されるのではない。例文(8)の“muy propicia (非常にさい先のよい)”で見られるように、本項の形容詞句、次項の名詞句のいずれにも共通して当てはまる特徴は、muy, más, tanなどの比較数量化の修飾を受ける属辞構成が著しく多い点である。

b. ser + 名詞句

(9) Por un momento A tuvo la impresión de que estaba siendo víctima de un secuestro. [t22.tgd]

(10) En la región de Podujevo, en el norte de Kosovo, alrededor de 60.000 personas siguen refugiadas en aldeas, donde están siendo víctimas del hambre, la sed y las enfermedades. [PE : 99/06/17]

(11) Los mercados periféricos (Italia, Francia, Portugal y España), que tantos altibajos han experimentado a lo largo de este ejercicio, están siendo ahora el centro de atención de los grandes inversores internacionales. [MD : 95/11/28]

(12) Al igual que en San Diego, el aborto está siendo el tema tabú en la convención. [MD : 96/08/28]

(13) La sensación que yo tenía es que Eire estaba siendo, de lejos, el rival más duro, más serio, de todos los que habíamos tenido. [MN : 02/06/17]

この種の文で、補語名詞句の内部構造には様々なタイプが存在するが、その変異の詳別は省く。例文(9)は、estar + ndo形式が「誘拐の被害者」たる実感を連続して累積したのでなく、por un momentoを文字通りに解釈して、「ちょっとの間」なぜかふとそんな印象を抱いた文脈である。また一方で、(10)が示すように動作・行為の被動作主ではなく、飢え、渇き、病、etc. 状態の経験者であるvíctimaもこの構文で用いられる。この文や、(11)、後出(34)のamenazasのように属辞に複数・集合名詞が含まれるのは珍しくないが、このことがestar + ndoで表象される事象の連続集積をマークする性向の現れとは思われない。単数実現の順次継続の途中段階という解釈のみならず、複数一括実行の途上、その混合であるという解釈も可能であるからである。

次例(14)で単純形のser víctimaの補部にある複数名詞は明確に累積結果と解釈できるが、これらは統語上の複数性の働きや他の語彙意味のおかげであり、非進行形で表出されることもごく普通である。いずれにせよ、進行形と組むことによって、‘犠牲者である’期間が当該の関連時点の周辺に限定されていることは確かである。

(14) [...] se comprobó que presentaba señales de haber permanecido largo tiempo atada y que había sido víctima de reiteradas violaciones. [PE : 99/11/16]

因みに、上掲例(9)-(11)のように、víctima, objeto, testigoなどの名詞が連結動詞の述語に現れる場合が目立って多いの気づく<sup>7</sup>。すなわち、“被動者”の意味関係をもつ名詞句が属辞に立つことで、主語もまた同じ役割を担うこと



になるが、この事実はestar siendo構文で多数派を占める受動文との平行性が影響しているのかもしれない。そして、自らの意志によらず特定の事態に巻き込まれた当事者であることの事件性を前景化して伝達するのに役立っている。estar siendo objeto de < investigación, estudio, polémica > など、動作と関連づけられる名詞が deに後続するとき、それぞれ、「調査中、検討中、論争中である」という、その動作が進行形化を受けた意味と同等になると考えられる。

c. ser + 人称代名詞

(15) El tema para mí es así : tengo la posibilidad de tener un espectador o 500 espectadores. ¿Estoy despegado, estoy siendo yo mismo, o soy una cantidad de formas preestablecidas para eso que llamo comunicación? [NA : 01/04/21]

(16) P. Por un momento se creyó reina de Castilla.

R. Yo estaba siendo ella cuando estábamos rodando. [PA : 01/10/07]

もし、「変化」が含意されるときに進行形が可能であり、そうでない場合は不可能であるとするならば、(15)において、むしろ変わらぬyo mismo「自分自身」を補語とするのがser単純形で、可変性を示唆するuna cantidad de formasがestar siendoと組むべきと予想されるが、実際は、その逆になっている。文(16)に類する表現では、その振る舞いが演技と理解され、Activityに還元されるので進行形になるという分析もよく行われている。しかし、一方で、主語は割り当てられた役柄の受容者で、ser ellaは静的な陳述predicaciónと見なすこともできる。撮影中は私は彼女になり切っていて、ser reina de Castillaである資質と、役柄として演じていた自分のイメージを重ねて同一視していると解釈できる。主語の帰属有効時間から見ると、ある役を演じる期間のみが別人であるという時間の限定性とも関連づけられる。

d. ser + 副詞句

(17) No ha sido ni está siendo así. [UN : 03/09/30]

e. ser + wh 句

(18) Aznar contestó que la aportación española en la fase de posguerra será : “la que está siendo : ayuda humanitaria, apoyo a la reconstrucción del país y establecimiento de un régimen libre y democrático en Irak”. [AB : 03/05/15]

(19) El pasado, el presente y el futuro interesan al hombre inquieto y le incitan a estudiarlos, a verlos con mentes inclinadas a saber, para que el hombre haga ciencia de sí mismo y llegue a entender con mejor precisión qué ha sido él, qué está siendo y qué va a ser. [PA : 00/05/23]

(20) ¿Cómo, por ejemplo, va a respirar Pedja Mijatovic -ya en Budapest, a esta hora de la madrugada- sin saber lo que ha sido o está siendo de sus padres? [ES : 99/03/25]

f. *ser + 前置詞句*

(21) Además, los esprints del Tour están siendo de una intensidad y belleza impresionantes. [PE : 99/07/09]

(22) Instituciones que nos parecen tan enormes, tan terribles, tan universales, se hacen granos de arena, cuando con el pensamiento rodamos por esta bola y nos vamos a donde ahora está siendo de noche. [TR : 149]

(23) El esfuerzo no está siendo en vano. [MN : 01/06/10]

前項e, 本項f. の各例文で認められるのは、前時・後時と対照的に捉えられた、厳密な現在の有り様にこだわる一面だが、*ser + 属辞自体に動的な変化を検出することは難しい*。

g. *ser + clitic*

(24) No será fácil ; ya no lo está siendo en Premià y en otros puntos de Cataluña. [VG : 02/05/28]

(25) Ignoraba entonces, y lo sigo ignorando ahora, si sería viuda o si lo estaba siendo. [TN]

上の2文は、共に先行文で推定法（それぞれ非過去・過去）と後文で直説法（それぞれ過去・非過去）と続けて表出し微妙な対比を作り出している。推量して「容易でないだろう」と一度述べたものを、具体的な現実場面に置き換えて、実際に容易でない現況を確認しているのが文(24)である。

h. *ser + 不定詞*

(26) Hay gente para la que el éxito es ser poderoso, para otros tener un Mercedes y para otros es intentar ser feliz cada día. Para mí, de momento, está siendo poder vivir de lo que me gusta” [MR : 150]

(27) De alguna manera, la primera intención de los incendiarios está siendo destruir el mundo donde ellos mismos viven. [AB : 05/11/13]

例文(26)で動詞*vivir*は、迂言形（助動詞）*poder*に先行されているのでなおさらのこと、*ser poder vivir*をActivityタイプの述語とは見なし難いし、他の動態性の干渉も想像しにくい。

i. *ser + 名詞節*

(28) El líder socialista reprochó a Aznar que una de las características de su

estilo de gobernar esté siendo que ‘riñe mucho y tolera poco’. [PA : 01/06/27]

j. ゼロ属辞ser

明示的属辞を伴わないestar siendoも時おり用いられている。補語がコンテキストから復元される場合か、serが非連結的に「存在する」の語義で使用される場合か、のどちらかである。

(29) Hay que recurrir al vivir. “Vivir el presente” tiene pleno sentido porque vivir equivale a estar siendo y a ser estando. [PA : 00/05/23]

(30) : en España lo que no puede ser, sí puede ser, y está siendo. [AB : 04/10/06]

(31) No reniego de nada. “En vías de” es la máxima del gestalismo : no soy, ni seré, ni fui. Estoy siendo. [DM]

(32) ¿Qué tal fue la Navidad, señor Conde? Está siendo. Está siendo todavía, claro. [CREA : ORAL, ESPAÑA],

あり得ないこと、あり得ることと「現にあること」の対照が、estar siendoによって前面に出され、明確に際立たせられているのが例文(30)である。(31)はゲシュタルト療法を話題にしていると思われるが、過去にどうであったか、普段何をしているか、将来いかにあるかを問わず、正しく今、ここでいかなる状態にあるかが問題だという発話時点への局限にこだわる。実現後、実現停止後の、漠然とした今ではなく、実現中の“いま”、その前後と切り離された途上にのみ言及しようとしているのだろう。最後の例では、主語がクリスマスで、その時期がまだ終了しない途中にあることを明示しているのは明らかで、活動的な、行動的なクリスマスの過ごし方などの含意と結びつけるのは困難である。

### 1.3.2. 法時制形・不定形の分布

前項ではserに後続する補語の構成についてその多様性を概観し、様々な統語環境にestar siendoが実際に利用されているのを確認した。上掲の用例の中で、estarの直説法：非過去形・過去不完結形が多数の構文で使用されていた。以下ではこれら以外の法・時制形がこのタイプの迂言形式と共起する例文を示す：

a. 直説法過去完結形

(33) Estuvimos siendo camiseteros mucho tiempo y, de hecho, sigo siendo camisetero. [AB : 02/09/22]

この種の例は、*estar + ndo*形が「より短い具体的な持続の過程」に言及するという一般的な規定 (Gómez Torrego 1988 : 141) への反例だと主張されるかも知れない。進行形が“持続の過程”であるかどうかはさておき、その本質と時間の長短とは無関係と思われる。この場合、「長い間」は*estar*の過去完結形により支えられると見る。

**b. 直説法非過去完了**

(34) “Dentro de esta demanda señalamos que algunas personas del sector educativo han estado siendo víctimas de amenazas, (por lo que) violentan el estado de derecho y los derechos humanos de las personas”, afirmó. [UM : 04/03/17]

(35) España ha estado siendo una escala para los trasiegos de la agencia de espionaje norteamericana CIA en sus operaciones de detención expeditiva e irregular de sospechosos de formar parte de organizaciones terroristas como Al Qaida. [AB : 05/09/15]

(34)(35)両文とも、*estar*の時制は非過去完了形であり、過去に始まった事態が現在まで持続したことはこの時制形で伝達されている。しかし、*estar + ndo*はさらに上書きして持続性を強めているのではなく、別の働きをすると分析する。いずれにせよ、進行形は特定された期間幅を明示する特性をもつという主張 (Doiz-Bienzobas 1995 : 162) は、どちらの文にも適用するのが難しい。

**c. 直説法過去完了**

(36) El oro había estado siendo la parte menos activa de las reservas porque, entre otras cosas, durante un período largo había tenido un doble precio. [RV]

**d. 推定法非過去**

(37) Es consciente de que las rutas más afectadas estarán siendo otra vez las del Atlántico Norte, en donde las compañías españolas tienen poco mercado. [AB : 03/03/28]

**e. 推定法過去**

(38) Tomar riesgos que son necesarios en cuanto a mostrar la música que uno ama. De lo contrario no estaría siendo genuino”, explica. [NA : 03/10/16]

**f. 推定法過去完了**

(39) Hay una parte del diario en que Merton se pregunta si él en ese amor no habría estado siendo fiel en una forma oscura a un llamado inescrutable de Dios. [ND]

g. 接続法非過去

(40) De momento, no se puede decir que esté siendo un éxito. [MN : 02/08/31]

(41) No es que estemos siendo excesivamente optimistas. [AB : 03/10/27]  
例(40)の主語はun plan israelí de alto fuego「イスラエルの停戦案」で、停戦へ向かう過程の途上にある状況を表している。「成功を収めている、ヒット中である、売れ行きが上々だ」を意味するser (todo) un éxitoは、しばしばこの迂言形と組んで用いられる表現である。話者側の評価を示すこのタイプの属辞は、serとestar + ndo形式が結合することによって、出来事の全体性ではなく、その一部分である現況を観察・体験している段階でそれを成功・不成功と評しているものと考えられる。

h. 接続法過去

(42) Cuando cuenta la historia del Oscar, o cuando habla sobre el cine americano y su relación con la industria de armas, el tono serio en que lo hace, esa manera neutra de hablar como si no estuviese siendo gracioso y siéndolo mucho. [PA : 00/09/24]

進行形がcomo si節中など、仮想的な事態を表現する構造で用いられるのはまれではなく、(42)のようにser文にも確認される。現前の実世界を直接的に提示するのがestar + ndoであると規定すると不都合なケースである。

i. 接続法非過去完了

(43) ; el que una empresa municipal haya estado siendo motivo de polémica y que últimamente haya llegado a dar lugar a la intervención de otras instancias- y no digo, como Vd., que se haya cometido delito o ilegalidad alguna- ; [NE]

j. 接続法過去完了

(44) Si hubiese sido cierto que Pedro y Pablo predicaban diferentes evangelios, esta reprimenda y las declaraciones que le siguen carecerían de sentido, pues Pedro solamente hubiese estado siendo consistente con lo convenido en Jerusalén según su tesis. [IN]

k. 不定詞

(45) No creo estar siendo pesimista al visualizar de esta manera nuestra cultura urbana, aunque me pregunto si mis metas son factibles de alcanzar en el país que nació. [UN : 01/01/06]

(46) El rector de Tossa de Mar, Enric Costa, que ha sido agredido en tres

ocasiones, podría estar siendo objeto de un chantaje por parte de un grupo de personas que le amenazan con hacer públicas unas imágenes suyas comprometedoras. [VA : 95/03/11]

*pesimista*, *optimista*などの名詞（形容詞）が属辞となる文Cf. (41) (45) etc. では、*ser pesimista*と*estar siendo pesimista*の差が明瞭である。後者では、当面の具体的出来事に対する判断の仕方に対する特徴であり、その人の悲観主義的な性向とは区別されるだろう。*ser*が全幅の特徴付けとすれば、*estar + ndo*形には時間的な面を含めて偶発性と部分性が付随する。

上記のように、§ 1.3.1.及び § 1.3.2.で多くの例文を引用したのは、*estar siendo* 非受動文が、周辺のなごく限られた統語環境あるいは語彙的コンテキストのみに見られる散発事例ではなく、動詞*ser*もまた、*estar V-ndo*迂言形でもって普通に発現するレパートリーに含まれるべきと考えたためである。通観した各文から、この型式の進行形文を排他的に特徴づける特有の性質を取り出すことは困難であろうが、従来から*estar + ndo*構文の文法価として議論され提案されてきたもの（Cf. § 3.1）から大きく逸脱する別種のものではないと考えられる。

## 2.1. *estar + ndo*とAktionsart

*estar + gerundio*の使用と意味は、文法的アスペクトだけでなく語彙アスペクトにも依存すると主張されている（Yllera 1999 : 3402）。このテーマに関しては用語法にかなりの不一致と混乱が見られるようである。本稿では、一方でAktionsart（以下、AA）を基準とした動詞のクラス化、あるいは動詞やその項を含む諸構文の種別と、他方でそのような動詞（述語）を用いた（法・時制・アスペクトを伴う）文に結びつく1つの状況のあり方またはその内部構造の透視とを区別することにする。前者はAAタイプ、または動詞タイプ（動詞〔句〕のみが問題になるのではないが、それに依存する要素なので略して）と呼び、後者を局相（アスペクト）という表現で言及する。局相は、中には語彙的手段によるものもあれば、屈折形態素や派生形態素でマークされるものもあって様々な実現方式を有す。AAの類型化は事象（事態、State of affairs）のパターン分類とも区別されるべきである<sup>8</sup>と考える。後者はもとより絶対的な型枠に嵌るようなものではなく、言語普遍的視座から見ていくつの型が必要で、十分か、なぜそうなのかが議論し尽くされたわけではないだろう。これはいわば言語外現実のモデルの多様性を扱う。例えば、動詞語彙単位である*llegar*の概念化を通してその軌跡全体の特徴（完成モデル）を

捉えて、この動詞をAchievementと範疇化することができるかも知れない。しかし、*llegaban, estaban llegando, empezaron a llegar*等々はそのクラスの成員の1つの利用事例instanceのいくつかが問題になっていて、この動詞*llegar*の特性の全体像でもクラス所属の概念でもない。

動詞Vが*estar + ndo*を得て、*estar V-ndo*になるということはVの時間構造内部の一部位、つまり局相を表すoperatorが作用すると見なすべきであり、AAタイプ所属が変更するのではない。つまり、到達・達成動詞を含む*estar V-ndo*文で、telicityがなくなってActivity類に変更されている (Camus Bergareche : 546) とは考えない。従って、ある用法でAchievementからActivity (or State) クラスに変化した (シフトした) というのは属性と様相との面妖な混同である。一定の統語形式を含む文によって典型的にAchievementタイプの特定期動詞がある局相を呈する (あるいは呈さざるを得ない) ケースであって、“AA類化から言えばAchievementと分類される動詞”の潜勢的所業である軌道の部分様態をかいま見るのに過ぎない。

進行形の議論でこのようなAAタイプが引き合いに出されるのは、進行形の成立条件にその所属類型が関与するという見解のためであろう。状態 (静態的) 動詞*verbo estativo*は一般に進行形を許容しないと主張され、また逆に、静態性を認定する手段として進行形構文が用いられることもある。State (静態) 類の動詞と非進行形化との対応関係を維持したいためであろうか、例えば(47)で、Clements (1985 : 92) は、この両動詞を含む文が文法的なのは、それらがActivityに変化するためとしている。もっとも二次的なAa<sup>9</sup>である [+emphatic] を採れば、Stativeとしても存在するという。Yllera (1999 : 3411) も同様な考えを示し、強意的現前化*actualización intensiva*を受けて、進行的または起動・進行的価値を得れば*estar + ndo*の使用ができるとする。

(47) *María está amando/queriendo a Juan.*<sup>10</sup>

De Miguel (1999 : 3014) もまた*querer*が*estar + ndo*と組んでいるのは【Cf. (48)】、副詞修飾語句 *cada vez más*によって情報が動態化されているためだという。

(48) *Te estoy queriendo cada vez más.*

既説の § 1.3. の各例文で明らかのように、「*estar siendo* + 属辞」構文の成立に*cada vez más*あるいは同様な増減表現が必要であるわけではない。また逆に、*cada vez más*を含む構造が義務的に進行形を要請することもない。

(49) *El recelo hacia el secretario de Estado está siendo cada vez más evidente.*

[QP : 03/07/04]

実際、上例(49)のように述部に *cada vez más* を伴う動詞句が *estar siendo* と共起するのはむしろごくまれで、資料体を広く見渡せば、下文のような非進行形 *ser* 文が圧倒的に多数である。

(50) *El agua me llegaba ya al pecho y las olas eran cada vez más violentas.*  
[MD : 96/04/27]

しかも形容詞補語が、それぞれ「ますます激しくなった」と「ますます明らかである」を意味する前掲2例文において、動的状況が含意されるかも知れない前者で非進行形、抽象的で目立たない概念の差異を表す后者で、進行形が実現されている。従って、動態性と *estar + ndo* の間に強い双方向の吸引力があるとは認められない。通常の比較文についても一考を要するだろう。

(51) *Hoy hace más calor que ayer.*

上文(51)の表現から推測して、昨日から今日にかけて発生した状況コンテキストを1つの拡大された出来事と捉えれば、その中に *Process* とも言える何らかの変化や動きが関与するだろう。しかし、文(51)が描写している事態は昨日と比較した今日の暑さであり、その述語には '*Hoy hace calor*' と変わらぬ等質性 (Moreno-Torres 2000 : 47) が認められ、従って *State* の1例とみなされるだろう。「今日は昨日より暑い」は「暑くなる」という過程ではなく、状態や結果状態を表していると考え<sup>11</sup>。

迂言形 *estar + ndo* が静的事態を *Activity* 類化するという分析には次のような疑問が提起される。もし *cada vez más* を手がかりに *estoy queriendo* に動的な状況を仮定するのならば、*quiero cada vez más* も同様に *Activity* 類であると見なす必要が生じる。その結果、*Activity* 化は *estar V-ndo* 形を特色づけるものとは言えなくなる。では、単なる直説法非過去形や過去不完結形の背後にある状況と *estar V-ndo* で表される状況の対立は何に依拠するのか。進行形と最も相性がよいとされる元々の *Activity* 類などに対しては、例えば動詞 *caminar*, etc. に対しては *AA* 類変更を惹起しないから、*estar caminando* は何も加えられなかった(空的に適用された)結果なのか。あるいは動態性がさらに強化されたのだろうか? 上述のような見方の相違は、Porras (1984 : 199)<sup>12</sup> でも力説されている2種類の *estar V-ndo* の存在、すなわち、真の進行形文 *True Progressive* と疑似進行形文 *Pseudo Progressive (=Cursive)* の区別の基盤とも関係があると思われる。

(52) a. *Sergio {ahora/en este momento} está trabajando aquí.*



b. Sergio {ya/últimamente} está trabajando mejor.

Pseudo Progressive【a文】は明確な現前の過程・活動に言及するのに対して、True Progressive【b文】は発話の時点（目標点）に向けての進捗（展開的）過程であり、この場合のestarはvenirと交代可能と分析されている。小論の見方によれば、進捗と推移を描写するのは、むしろir（やvenir, seguir）+ gerundioなどの迂言形であり、典型的なestar + ndoはVの動きや状態の流れを一時的に中断して見せる働きをする。estar + ndo構文として現れる静態的動詞が、比較表現だけでなく各種の数量化修飾語句を伴って出現しやすいのは根拠があり、この迂言形式の原機能と関連することは後出3.2.節で言及する。

## 2.2. 迂言形式とestarの役割

現在分詞を含む諸構造の中でestar + ndo迂言形式の占める比重についてはLajmanovich（1967）の調査を参照することができる。彼は厳密な形式的基準で、迂言形と非迂言形を分離する手続きを設けた後、20編の劇作品中に出現した現在分詞814の分布統計を提供している。それによれば、andar, estar, ir, seguir, venirと組むperífrasisがそのうちの61.9%を占める。これら5型式の内訳ではestar + ndoが抜きん出て高頻度を示し、337例（66.8%）を記録する。このことは現在分詞自体が担う各種の統語意味機能の側からみてもestar + gerundio構文は重要な中核的役割を分担することを示している。

estar V-ndoを含む構造の中には、明らかにestarがVと共に迂言形式を形成しない場合がある。estarが場所格補語を伴う場合はとりわけ、copula動詞と副詞的現在分詞構造の連鎖である可能性も高い。Porras（1984：207-209）の指摘するような、estarが所格的意味を残す静態的な用法（Cursive構文）から、迂言的助動詞になり切ったProgressive構文まで、estarの実質的中身の濃さをグレード化できるかどうかは別として、estar + ndo形式の意味機能を考える上で、単独主動詞または連結動詞としてのestarの果たす働きを重く見るべきであるという点では同意する。その点で参考になるClements（1985）のアプローチと、ser/estar対立に関する筆者の見解の一部についてもごく簡単に触れておく。彼はcopula動詞estarの意味を幅広く説明するため、この動詞に対して語用論・意味論的な性質をもつ [+nexus] という素性を仮定する。この「結合」の作用によって“常にもう1つの場所、状況、事態などがあることを告げ、因果、対比、条件的な連携が成立する”という。彼はestar + 形容詞構文をいくつかタイプ化して例を挙げ、それらの意味解釈を提示した後、

*estar* + *ndo*構文における [+nexus] の意味作用についても論及する：

(53) Juan *está siendo* sincero. (Clements 1985 : 109)

(54) La palabra *está significando* tal cosa. *idem.*

文(53)では、フアンの普段のあり方と対比して、いま、誠実なことを含意し、文(54)もまた、「通常／例外的」の対照性を強調したいために、話者が（単なる*significa*でなく：引用者注）*estar* + *ndo*構文を用いると説明する。

長い論争の歴史がありながら解決の決定打が出ないままの*ser/estar*問題に、Franco（1979 : 131-132）は興味深い仮説を提案した。両*copula*動詞の選択指針を与える際に*paradox*と思われたいくつかのケースで彼女の簡明な説明法が役立つ。

(55)

(c)  
X  $\longrightarrow$  X

(c)は*comparación*を表す

(c)  
X  $\longrightarrow$  Y

上掲(55)は、例えば、*Está joven/Es joven* の対文で、話者が主語である彼自身との自己比較（X→X）をして「若い」と表現するときには*estar*を用い、自分と他者との比較（X→Y）を意識するのであれば*ser joven*と言わなければならないことを直感的に見せる図式である。Francoによれば、この比較は特定の時間差におけるX同士でも、平生のXと今の特定時のXとの間でも、さらに予想や想像していた初見のXに対しての比較についても適用できる。確かに、同一形容詞を補語とできる構文で、主張されるような概括的原理を把握することは有用であると信じるが、*ser/estar*における意味対立が、そのまま平行して（V）vs.（*estar* V-*ndo*）に敷き写されるという点までは証明されていない。*ser/estar*の使い分けが厳密な論理の整然とした網の目で仕切られているという単純化した観点は支持することができず、多くの個別語彙依存の例外や局所的な小ルールからなるような印象をもつ【Cf. 出口1996 : 221】。従って*estar* + *ndo*構造における*estar*の寄与分はなお不透明になっている可能性がある。

### 2.3. *estar* + *ndo*と屈折アスペクト

迂言形*estar* V + *ndo*が到達している文法化の段階、その複合統語構造としての成熟度や一体性について、客観的な評価と記述は難しいと考えられる。本稿は、*estar* + *ndo*をアスペクトmarkerとみなす主張に特に依存しないが、

この形式が広い用語法での「アスペクト性」に関わる役割を演じることは確実であろう。助動詞として分離されるestarが、直説法過去時制において完結・不完結の文法的アスペクトの対立に関与するし、またこの迂言形式の働きそのものが同対立と接点を持つため、ここではestar + ndoと屈折アスペクトの関係と差異について私見の概略を述べておく。

後者のアスペクト特性は特定の法・時制形にのみ有効な統語特徴ではないが、語形態上にも顕在化する直説法過去時制に見られる対比については、出口(1997: 122-125)の図式化を継承する。すなわちLuis leyó mi carta/Luis leía mi cartaの違いは、完結形leyóがこの事象を全体として総括的に提示するのに対し、不完結形leíaは言及時点で読む行為が存在した旨のみを伝える点にある。また、入門学習者向けに述べた《広角レンズ(過去完結相) vs 望遠レンズ(過去不完結相)》の比喻もこれらのアスペクトの対照を理解するのに一助となるかもしれない【出口(1990)】。実世界ではレンズのズーム度と関係なく1つの同じ状況があり得たにもかかわらず、接眼側が選択した認識範囲(捉え方)の差で、違った映像(概念化され認知されてコード化される情報)が写る。両文の背後にあった状況で、ある時に本の読み始めが存在したことは間違いない。問題の時点で、前者の文では話者はその状況全体の完結を認識したのに対して、後文では始まりは通過済みとされ、終了も不問にされている点に明確な相違がある。これより後の時間における、(LUIS LEER MI CARTA)の状況の有無、その延長期間は時制・アスペクトが所轄するところではない。ただし、直説法過去完結形vs不完結形の文法価の対立が排他的にアスペクトによるものでないことも確かであろう。それは、過去vs非過去の時制対立がすべて時間で説明され得ないのと同じである。

(56)(57)は“部分持続”の最小単位とみなされた「相片」を基本として、完結相／不完結相を対比させる文法基準の基盤となる全体・局部の対立を表そうとするものである。相片(線分で表示)は、不定量の時間を持ち、その本質からして多かれ少なかれ時間的な広がり認識され得るが、瞬時的な延長に過ぎない可能性も容れる。すなわち、瞬時が即、完結性や点的アスペクトと直結することはないと考える。上段Aの線は経験世界での事象の存在を表象する。一方、下段Bの線には事象を捉える観察者が位置し、線分は走査軸が残す軌跡とみなす。

- (56)    A    ———  
           B    ———

(57)    A    ———  
          B    —

1つの特定の状況（事態）は、恣意的段階で外部から相片増殖の停止が指示されて、あるいは状況の固有的性質から自己終結することで、その全体化が完成する。スペイン語過去完結形は、(56)のように、走査側の線分が状況側のそれより大きい全体相（ $A < B$ ）の基本パタンに属する。空状態から線分への移行、その逆の移行をB層はキャッチしているからである。(57)は過去不完結形動詞で描写される状況のモデルである。状況の特徴づける線分よりも走査側の線分が短く（ $A > B$ ）、状況の一部分のみを取得しエンコードしたことを示している。ただし、(57)のように捉えられた相片が具体的な始点、終端で限界づけられ(56)に見えるケースや、有界的な状況が存在したはずであるが、他に優先順位の高い基準が働いたため、終結部が写角から消え無視されて、(57)であるかのように実現されることもある。ここではそのような具体事例を扱わない。

図(56)(57)が形式化して表現しようとするのは、状況の「持続」と走査により取得された持続総体との関係、両者に含まれる共通要素、一方にのみ含まれる要素の明示化である。重要な点は、仮定された原単位が一定の持続とその（始まり及び）終了点を持った小片ではなく、持続を有するが、それ自体は自動終了しないオブジェクトであるということである。概念化の開始と終止がなければ下段のB層は存在し得ないが、その存在区間は状況（出来事）の始まりと終わりとは必ずしも一致しないからである。

不完結相は相片の実体部のみを見ているのに対して、完結相は、空→相片、相片→空の境界をも見渡しているという意味で、不完結相より複雑な構造体である。単回状況に関する限り、完結相に該当するような状況が連結して、あるいは累積して不完結相に該当する状況が存在するのではないこと意味する。むしろ、時間位相的にみれば、逆に不完結相に相応しい世界の展開を延長して走査側範囲を拡大して把握したのが完結相に相当する。いわゆる点的局相（→点過去形）の積み重ねが線的延長＝持続（→線過去形）につながるという分析とは反対の解釈をする。一方では、点過去形を単純な《過去》として、線過去形を《過去》と共存する、あるいは《過去》の視点から見た《現在》と対立的に捉える見方【出口（1977）】とも異なる。

上述のような事象（一連の状況の集合）の捉え方をする根拠は、非常に原始的な、我々のオブジェクトの認知法にある。人は物や事柄の始まり（や存

在し始め)を認識しなければそれを捉えられないのではなく、途中から、突然に既存するものとして出現しても、実在を知覚したその始まりを推定したり、それを捨象することができるという経験を持っているからである。多回体、反復、習慣などの多重性のある(multiplex)数量化アスペクト状況はOperatorを通じて上記の概念化と(または、から)結びつけられると予想するが拙論の射程外である。(56)(57)のいずれに認識された状況も、再び(56)(57)のA層にフィードバックされ得ると考えられる。すなわち、文構造レベルでテンスと共に付与・決定される総括相/局限相の2項特性が完結/不完結アスペクトであるとすれば、estar + ndo, ir a + 不定詞, empezar a + 不定詞, acabar de + 不定詞, etc. は動詞句の階層で任意的に局相を表現する迂言形式であると言える。

全体・部分性に関わる特徴が、法・時制としての「直説法」「過去」を指定されない動詞形式、例えば「非過去形」、「不定詞形」等にも関与し得ると思われる。顕在文法形式と結びつかないそれらが完結・不完結の対立と同質なものであるかどうかについてはここでは立ち入らない<sup>13</sup>。また、上記の図式化において、動詞屈折に含まれるアスペクト形態素(叙法及び時制と融合している)が p.ej. (57)のような線延長に相応する時間パターンを表しているのではなく、並存整合性という性質のみを有す<sup>14</sup>点も断っておかねばならない。

なお、過去時制に見られる不完結性は、法・時制にかかわらずestar + ndo形式が固有に含んでいる不完結の局相と類似する点も興味深い。

(58) a. Este libro es muy interesante. (Alturo 1999 : 159)

b. Este libro está siendo muy interesante. idem

文aは、発言のタイミング次第で、本全体を読破せず、従って内容も十分把握していない段階で、つまり(b)と同様な、部分的有効性を示す意図で用いられることもある。相片は必ずしも“読む”、“見る”など行為の時間延長の1部分というよりは、この述語の判断の背後にあるさまざまな種類の意味的構成要素を統合するまとまりでなく、未統括のまま、本のある狭い範囲を指してその部分的な興味を限定する場合でもあり得る。

### 3.1. 進行形の機能

第3節では、estar + ndo形式の意味機能、その分類細別や迂言形としての文法価についての先行諸説を再訪することはせず、estar + ndoの諸用法を統一的に説明する原機能についての代案を素描する。

Seco (1989 : 221) は簡潔な記述でスペイン語の進行形を下記のように特徴づけている :

*estar + gerundio expone una acción durativa (presente, pasada o futura) haciendo más patente su “actualidad” y su vigencia que el simple tiempo verbal durativo (presente, copretérito o futuro) :*

ここで指摘されている *acción durativa* (持続的動作) 及び *actualidad* (現況性) は彼以前、以降にも文法記述においてこの形式の基本機能を規定するために使われる常套の語句であり、事実、そのいずれに重点を置くかが、進行形式の分析・研究の潮流の主要な分類基準となると考えることもできる。*estar + ndo*形式と単純動詞形の差異を指摘するこのような説明では、一方における特定の特徴の存在と、他方でのその欠如が際立たせられるのではなく、上記の定義でも、“より顕在化する”という表現がそうであるように、進行形でない動詞形態にも具有され得る特徴でありながら、その程度差の問題としばしばとらえられる (Moreno de Alba 1985 : 39, Luna Traill 1980 : 202) 事実にも留意する必要がある。それらが一概に誤った一般化であるとは言えない側面をもつが、拙論で問題提起したいのは、*estar V-ndo*の中核機能、あるいは意味不変項は、非進行形Vに既存の性質に対する表現性、強調、造形性、文体論的意図 (Fernández de Castro 1999 : 237) ; 現前化<sup>15</sup>、一時性 (Yllera 1999 : 3402) ; 活動的持続 (Doiz-Bienzobas 1995 : 165)<sup>16</sup> ; 不完結性の強調、明示、活 (動) 性、活写、躍動、力動感、などと称されるさまざまなニュアンスのいずれかやその組み合わせの付加と見るべきなのだろうかという点である。

もう1つの点は、伝統的なアプローチで多かれ少なかれ言及されるように、この迂言形と組むのは *acción durativa* の意味に属する動詞表現に限られるのか否かである。1.3. 節で、資料体Bから得られた非受動形の *estar siendo* 文の用例を取り上げて、その分布範囲の広域さを考察したが、これらにおいて *estar + ndo* 迂言形が Activity 類を前提にしているとか、State 類を Activity 相当と見直しているとは判断できないことを確かめた。実際には抑制的条件の存在を否定できないが、Activity は進行形式成立の必要特性ではなく、Morera (1991 : 215) の指摘するように *estar + ndo* はどんな動詞とも共起可能とまで言えなくても、原則自由であると分析すれば、この迂言形は AA タイプに対して結界を仕切らないことになる。

## 3.2. 結語に代えて：複眼ショットとしてのestar + ndo

次の4文が言語化した対象である外部世界の出来事（カメラが撮影した被写体）は同一であってよいし、異なる事象に言及していたとしても共通部分は多い。

(59) a. Pintaban la habitación. (Camus Bergareche 2004 : 546)

b. Pintaron la habitación.

(60) a. Estaban pintando la habitación. idem.

b. Estuvieron pintando la habitación.

非進行形文の(59)a対(59)bの間には§2.3.の(56)(57)で既述のようにフレーミングの差が存在し、とらえられた映像も違う。従って、屈折アスペクトの完結形・不完結形を伴うこの差が情報の中身つまり伝達内容の違いとして表れる。一方、(59)a対(60)a、及び(59)b対(60)bを較べると、共に不完結相か完結相を示していて、事象の内容そのものも同一であるけれども、(60)の両文には進行迂言形が含まれる。

(61)

A \_\_\_\_\_  
A'    └─┬─┘  
B       —

(62)

\_\_\_\_\_└─┬─┘  
                  Z  
                  —

これらestar + ndo文の場合は、図(61)(62)から看取できるように、scanが一時停止し、部分化の局相取得がなされた後、該当小片はさらに最新（最終）情報を提示するべくチェックされ、走査主体に近い位置A'でより直接的な情報を受ける。その全体像または部分相片に対して、再度 A'←Bのscanが行われることになる。いずれにせよ、(60)a, b = 図(61)(62)では状況の完結点を見通していない (B<A) 点が文(59)b⇒(56)図と区別され、(60)の2文には新たな特性が織り込まれると考える。すなわち、動詞Vがestar + ndoを実装して、estar V-ndoに実現されることによりもたらされる情報は、“当該の状況に関連するもう1つの情報を発話（参照）時点の最新情報で「更新」した結果である”ことの標識化であると分析する。再分析あるいは再解釈は暗黙裏にせよ一時的停止または中断を想定する。非進行形はこのような更新性を欠き、むしろ自然な進行のままに推移する状況に対応する。これに対して、estar + ndoは、2つのイメージを対照して複眼で捉え、新たな一方を情報として提供していることを明示する。従って、ここで言語化されているのは、広い意味で情報源・情報獲得法に関わる特性（証拠性）と繋がる性質の

文法手段化として見なされるかもしれない。いずれにせよ、典型的な、時間の内部フェイズに焦点を当てるのみのアスペクト性とは区別されなければならないだろう。

比較の対象が時間差に及ぶ場合、2つの状態間の遷移に近似し得るが、ここで「遷移」というのは動的な移動、移行ではなく、変化・継続のどちらをも包摂しない対照を意味する。対照結果が同じであれば持続性の確認でもあり得て、参照時点への限定性を前景へ引き出す。また、前状態をわざわざ更新することから、有効範囲の一時性を言外に推論させる可能性もある。対照結果が違えば、拡大コンテクストに対する変化への注目を含意する。対比は、経過済み時間に渡って行われるとは限らない。想像世界と眼前の事態、予想していた状況と現実の差、常識的な通念の属性と新鮮な発見の間にもなされ得る。このような複眼で取得されたイメージの最終（最新）版を提供していることを告げるのがこの形式ではないだろうか。以下、いくつかの *ser* 非受動文の用例を補足し、このような解釈を適用することが出来ることを確かめておこう。

(63) Este año no está siendo bueno para los mercados españoles y eso se ha dejado sentir en los fondos. [PA : 99/11/01]

(64) Julio está siendo, por el momento, el mes del año más trágico, al igual que ocurrió en 1999. [MN : 00/07/19]

上例文(63)(64)のような文は 進行形構文でしばしば観察される類型であるが、未だ終わっていない当該期間についての最新の述定をこの型式で表現している。未確定さは *estar + ndo* の中断機能と良く調和するものと解釈できる。

(65) [...] pero es la tarea que me toca cumplir en este momento, a lo mejor para algunos es poco divertida, pero para mí está siendo especialmente atractiva. [MD : 96/02/27]"

文(65)において、「ある人々には退屈かも知れないが、自分には特に魅力的である」に明瞭な対比性が表されているが、自分の予想や一般の想像・期待と較べられている可能性もある【文(66)】。

(66) “Los precios de la uva no están siendo los que tiene que ser”, dijo ayer el gobernador de San Juan, José Luis Gioja. [CL : 06/03/05]

(67) Como no me duermo, porque no hay manera, me he levantado y me he puesto a revisar mis apuntes sobre el erotismo. Llevo un rato con ello, pero está siendo peor el remedio que la enfermedad, porque no me gusta nada de



lo que tengo escrito. [NB : 105]

「薬が病気よりも悪くなる」というのは偶発的に生じた状態であり、進行形は述語を非属性化している。

(68) En realidad, el amigo no se da cuenta de en qué proporción lo está siendo cuando todo parece transcurrir normalmente. [NA : 03/02/08]

述語を断じて同定するには、ある程度の時間の経過や、様々な直接・間接の証拠を要するだろう。上文(68)では、そのような要件となる雑多な要素が、不完結な相片を形作り、この局面では、未完のありのままの部分的状況である現況を再確認しようとしてestar + ndo形式に頼るのかも知れない。非過去時制では全体性（完結）／部分性（不完結）を屈折上にマークできないからである。そこから、属性化に関する不全・途上・離脱であることを示唆するこのような非時間的用法がestar + ndo機能の延長線上に生まれて来ても不思議ではない。

estar + V-ndoは、更新された相片を切り出し、その中断面を意識させるという意味合いで非線形化機能を根本に保ちながら、一方でestarの部分は、その他の諸条件により、直説法過去完結形にも不完結形にも実現されるし、限界性に関わる表現と共に起すけれども、屈折的アスペクト形式としては無標のまま留まることも多い（非過去時制や接続法・推定法の過去時制）。estar + ndoで切り取られたVの局相は、非時間化すれば事象の断面あるいはスライスに過ぎないが、文構造の内部のさまざまな他の要素で、ある時は伸張・局限され、二次的な時間構造の中に組み込まれていく可能性を秘めている。

上記の分析は、estar + ndo形式がなぜActivity類の述語と共に用いられやすいかを説明する。状態の遷移を視野に入れる場合、同じ状態を再確認して持続を再説するよりも、動きのある異なる状況を情報として提供するのが「更新」としてより自然で価値があると考えられるためであろう。また、単純形式との対照で、特定期間を指向する傾向が強く感じられるという指摘も、このような最新化作用の結果と見なせば自然である。

(2007年1月10日)

(注)

- 1) 例えば、Carnicer (1972 : 46) は次構文をabsolutamente dispartadoと評す : Tellis y yo estamos siendo felices estos días.
- 2) 例外的に山村 (2001 : 150) の考察があるが、estar siendo + 名詞句・形容詞句構造として扱われた独自の資料データは合計7例である。

- 3) GDLE (Yllera 1999 : 3411) は、*ser*受動文と*ser* + 名詞句・形容詞句の進行形をそれぞれ4例、3例を提示して、簡単なコメントを添えている。GDLE (De Miguel 1999 : 3013) では可能性を認めるだけで例示は手控えられている。
- 4) LEXESPのタグとして注記された文法カテゴリーでは*haber* + 過去分詞からなる複合形式を法時制形として直接に計数化できないので、*ser*受動文を除く単一形動詞を数えた合計である。
- 5) 度数計算の煩雑化を避けるために、*estar*と現在分詞形動詞の間に他の要素や句読点を含まない連鎖を対象に該当度数を数えた。そのため主語、短い副詞などがこの間に介在する文が漏れる可能性がある。また文法タグは、下記のような場所格的*copula*文と迂言形式に両義的な構文、非迂言形と見なされるタイプを考慮していない。

Mañana a estas horas estamos comiendo en Valladolid. (Porras 1984 : 22)  
さらに、LEXESPの文法カテゴリーのマーキングに少なからぬ誤りが発見され、チェックして気づいたものは訂正した数値を反映しているが、なお修正漏れがあるかも知れない。

- 6) 次に記す5例文はコーパスA, B以外からの引用で、前掲の各種集計の数値に含まれていない : (32) (33) (36) (43) (44)。接続法未来、同未来完了は対象から除外されたが、推定法非過去完了は記録されなかった。引用された用例の出典は [ ] 内に、末尾の“電子化データ”欄で一覧の資料略号と、新聞の場合、その発行年月日yy/mm/dd、あるいは雑誌の号番数字で示される。なお、LEXESPにはソース文献名が明示されていないので、該当のファイル名 **\*\*\*. tgd**を記す。
- 7) *objeto de investigación*のように、活動または達成意味の名詞を後続させる場合も少なくない。属辞が同様な動作を想起させる文 *Esto es una guerra/ La vida es una guerra/Hay una guerra*等を*guerra*の意味を考慮してActivityタイプとみなすことをしない。また、下の対文で非連結動詞の左文のみが動態性を含むと考える。

*Trabaja duro. / Es un trabajo duro.*

*La operación fracasó. / La operación fue un fracaso.*

- 8) [+telic] [-durative], etc. の素性については状況の特徴づけるものとし、State, Activityなどを語彙アスペクト・タイプと使い分ける方法もあるが、Olbertz (1998 : 10) など、両種の表現ともに事態の分類基準の用語

として用いて混同している論者も多い。

- 9) Clements (1985) の用語でAktionsartの略。Verb Classificationとも言い換えられている。Main AaとSecondary Aaが区別され、例えば、lloverとlloviznarは主Aaを共有するが、後者は二次Aaの [diminutive] をもつという。
- 10) 動詞amarがhacer el amorの語義で用いられるケースでActivityと見なす問題とは別で、通常の「愛する」意味として進行形と両立する例はコーパスBに30例以上記録されている。
- 11) estar + gerundioにより表される状況タイプが静態的であると主張する他の論者についてはMarín Gálvez (2000 : 119) を参照。
- 12) 彼もまた、Progressive構文がアスペクト転換子Aspect Shifterの役割を果たすとみなす (Porras 1984 : 219)。
- 13) De Mello (1989 : 126-7) によれば、接続法、推定法の一部に単一形と完了形 (haber + 過去分詞形) にまたがる顕在アスペクト対立が見られる。
- 14) 例を挙げれば、「線過去形」が、「直說法現在」と同様に、“参照点と一致する同時性の限界点を含みまたそれを越える不定の時間次元”を指すとするSolé (1990 : 69) などの見解と異なる：

Estudiaba música desde la infancia.

拙稿の考えでは、estudiabaによって、少年期から過去の言及点までの時間延長が示されているのではなく、具体的な期間の広がりには前置詞句表現により始めて成立する。それは動詞呼応における、「呼詞と応詞」(出口1979-82) の関係に相似する。スペイン語には統語上の主語一致が存在していて、動詞3人称複数形は“10億人の人間”を主語名詞句とすることができても、その動詞人称形が10億という個体複数や集合に言及しているとは言えない。

- 15) 「現前化」はYllera (1999 : 3402) で、「述語の個別的かつ具体的記述への登録で、習慣的または潜在的事実としての、状況の仮想的な見方と異なる」と規定されている。
- 16) 単純形では線過去進行形のように、“状況が連続する時点の継起で生じていると認識されない”と述べて、継続性にも言及する。

## 参考文献

- Alturo, Núria (1999) : “El papel de la anterioridad y de la perfectividad en la representación de estados y eventos.”-María José Serrano (ed.), Estudios de variación sintáctica. Vervuert-Iberoamericana, Madrid.

- Camus Bergareche, Bruno (2004) : “Perífrasis verbales y expresión del aspecto en español”-Luis García Fernández y Bruno Camus Bergareche (eds), *El pretérito imperfecto*, pp.511-572.
- Carnicer, Ramón (1972) : *Nuevas reflexiones sobre el lenguaje*. Editorial Prensa Española, Madrid.
- Clements, Joseph Alexandre (1985) : *Verb Classification and Verb Class Change in Spanish*. University of Washington, Ph.D. dissertation.
- De Mello, George (1989) : “Some Observations on Spanish Verbal Aspect”-*Hispanic Linguistics* 3:1-2, pp.123-129.
- De Miguel, Elena (1999) : “El aspecto léxico”-Gramática descriptiva de la lengua española. 2. Espasa Calpe, Madrid., pp.2977-3060.
- Doiz-Bienzobas, Aintzane (1995) : *The Preterite and the Imperfect in Spanish : Past Situation vs. Past Viewpoint*. University of California, San Diego. Ph. D. dissertation.
- Fernández de Castro, Félix (1999) : *Las perífrasis verbales en el español actual*. Gredos, Madrid.
- Fernández Ramírez, Salvador (1986) : *Gramática española*. 4. Verbo y la oración. Arco/Libros, Madrid.
- Franco, Fabiola (1979) : ‘SER’ and ‘ESTAR’ in the Light of Modern Linguistics. University of Minnesota. Ph. D. dissertation.
- Gómez Torrego, Leonardo (1988) : *Perífrasis verbales*. Arco/Libros, Madrid.
- (1989) : *Manual de español correcto II*. Arco/Libros, Madrid.
- Lajmanovich, Josué David (1967) : *Sintaxis del gerundio español*. Georgetown University, Ph.D. dissertation.
- Luna Traill, Elizabeth (1980) : *Sintaxis de los verboides en el habla culta de la Ciudad de México*, UNAM. México, D.F.
- Marín Gálvez, Rafael (2000) : *El componente aspectual de la predicación*. Tesis doctoral, Universitat Autònoma de Barcelona.
- Moreno de Alba, José G. (1985) : *Valores de las formas verbales en el español de México*. UNAM, México, D.F.
- Moreno-Torres Sánchez, Ignacio (2000) : *La lógica en la gramática. El tiempo en español desde la Teoría de representación del discurso*. Universidad de Málaga, Málaga.

- Morera, Marcial (1991) : Diccionario crítico de las perífrasis verbales del español. Puerto del Rosario.
- Olbertz, Hella (1998) : Verbal Periphrases in a Functional Grammar of Spanish. Mouton de Gruyter, Berlin-New York.
- Porras, Jorge Enrique (1984) : Nonfinite Verbs and the Stativity Hypothesis in Spanish : A Semantic Approach to Aspect. The University of Texas at Austin, Ph.D. dissertation.
- Seco, Manuel (1989) : Gramática esencial del español. 2ª. edición revisada y aumentada. Espasa Calpe, Madrid.
- Solé, Yolanda Russinovich (1990) : “Valores aspectuales en el español.” -Hispanic Linguistics 4 : 1, pp.57-86.
- Torres Cacoullos, Rena (1999) : Grammaticization, synchronic variation, and language contact : a study of Spanish progressive -ndo construction. Ph.D. dissertation, Arizona State University.
- Vendler, Zeno (1967) : Linguistics in Philosophy. Cornell University Press, New York.
- 山村ひろみ (2001) : 「estar siendoについて」 - 九州大学言語文化論究No.14, pp.143-167.
- Yllera, Alicia (1999) : “Las perífrasis verbales de gerundio y participio.” -Gramática descriptiva de la lengua española. 2. Espasa Calpe, Madrid., pp.3392-3441.
- 出口厚実 (1977) : 「基底時制と表層時制—スペイン語時制体系の形態・統語・意味論的素描—」 - Estudios Hispánicos 4, pp.15-28.
- (1979-1982) : 「動詞呼応の類型(1)～(4)」 - 大阪外国語大学学報45, pp.1-18、他。
- (1986a) : 「スペイン語に“未来”はあるか？同格化された法・時制概念をめざして」 - Estudios Hispánicos 12, pp.1-16.
- Deguchi, Atsumi (1986b) : “Un nuevo modo presuntivo en substitución de los tiempos futuro y condicional” -Lingüística Hispánica 9, pp.19-34.
- 出口厚実 (1990) : 「スペイン語と文法用語(2)」 - NHKラジオスペイン語講座 8月号. NHK出版.
- (1996) : 「スペイン語の特徴：[8] serとestar」 - 山田善郎監修：スペインの言語、同朋社出版, pp.187-227.
- (1997) : スペイン語学入門. 大学書林.

## 電子化データ

- AB : ABC, Prensa Española, S.A. Madrid.  
CL : Clarín Digital, Clarin.com, Bs.As.  
DM : De Mujer a Mujer. No.886 (16 de octubre 1999)  
ES : La Estrella Digital, La Estrella Digital, S.A. Madrid.  
IN : Iglesia.net, Foro Cristiano ; <http://forocristiano.iglesia.net/howthread.php?p=61704>.  
LX : LEXESP (2000) : Núria Sebastián Gallés (cord.) : Léxico informatizado del español. Edicions Universitat de Barcelona. CD-ROM.  
MD : El Mundo en CD-ROM. Segundo Semestre 1995 ; Primer Semestre, Segundo Semestre 1996, Mundired.  
MN : El Mundo/elmundo.es. Mundinteractivos, S.A., Madrid.  
MR : La Revista de El Mundo, 1998, 1999.  
NA : La Nación Line, Diario La Nación, Bs.As.  
NB : Martín Gaité, Carmen (1992) Nubosidad variable, Editorial Anagrama S.A., Barcelona.  
ND : El Nuevo Diario. Sábado 16 de octubre 1998, Managua, Nicaragua. <http://archivo.elnuevodiario.com.ni/1999/octubre/16-octubre-1999/cultural/cultural1.html>.  
NE : La Nueva España, Prensa Asturiana Media ; <http://www.servicios.lanuevaespana.es/foros/index.php?act=Print&client=printer&f=2&t=2803>.  
PA : El País Digital. Diario El País, S.L., Madrid.  
PE : El Periódico de Catalunya, Ediciones Primera Plana, Barcelona.  
RV : El Rincón del Vago. Organización Económica Internacional ; [http://html.rincondelvago.com/organizacion-economica-internacional\\_2.html](http://html.rincondelvago.com/organizacion-economica-internacional_2.html).  
QP : Qué Pasa, CÔPESA, la red TERRA Networks Chile, S.A.  
TN : Celis, Agustín - “Mujer de terciopelo Negro” publicado en Ficticia, 2003.  
TR : Perez Galdós, Benito - “Tormento”, Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes.  
UM : El Universal Online, El Universal Online México, S.A., México, D.F.  
UN : El Universal Digital, Diario El Universal C.A., Caracas.  
VG : La Vanguardia Digital, La Vanguardia Ediciones S.L., Barcelona.  
VA : La Vanguardia en CD-ROM, La Vanguardia electrónica, Barcelona.